

# オープンキャンパスと志願行動の関係性に関する実証的検討 ——出願率・参加率・出願回数・入試欠席率・入学辞退率からの分析——

山田 恭子 (琉球大学), 川端 ひなた (広島大学), 高良 健作 (琉球大学)

本研究では、オープンキャンパス（以下、OC）への参加と大学志願行動の関係を多面的に検証した。出願率やOC参加率に加え、出願回数、入試欠席率、入学辞退率といった指標も用いて分析した。その結果、特に高校3年時のOC参加と出願との関連が顕著であり、参加回数が多いほど出願率が高いことが確認された。さらに、OC参加者は出願回数が多く、入試の欠席率や辞退率も低かった。これらの行動は、志望意欲や入学意欲の高さを反映していると考えられる。これらの結果から、OCは志願者確保の手段にとどまらず、進学意思を支え、高大接続を支える教育的機会として意義を持つことが示唆された。

キーワード：入試広報、志願者動向、高大接続、高大連携

## 1 はじめに

### 1.1 オープンキャンパスの歴史と意義・目的

令和6年度（2024年度）、大学進学率は、過去最高の59.1%となり、大学進学者数も628,766名に上る（文部科学省, 2024）。その一方、私立大学の入学定員未充足校の割合が59.2%（日本私立学校振興・共催事業団, 2024）となるなど、学生募集は厳しい状況下にある。令和6年度の全国の18歳人口は1,063,451人となり、減少が続いていることから、今後状況はますます厳しくなることが予測される。

そのような中、各大学は学生募集のための入試広報に力を入れている。中でもオープンキャンパス（以下OCとする）は、多くの生徒へ自大学をアピールすることを目的に、ほとんどの大学で取り入れられている。小島（2010）によると、進学情報誌が掲載したOCに関する記事から、「オープンキャンパス」という名称を用いた初の進学相談イベントは1988年立命館大学で開催され、その後他大学でも実施されるようになった、としている。なお、そもそも受験生を対象とした大学内での進学相談会は1978年に立教大学において「進学相談会 on Campus」という名称で初めて開催されたとされている（小島, 2010）。このようにOCが自大学をアピールする機会として重視されている背景には、入試広報の手法として長く用いられてきた歴史があると推測される。

上述したように学生募集の状況が厳しさを増す中、各大学はOCを行い、自大学の情報を伝え、志願者を確保、増加させることを目指している。そのため、OCを行うことが志願者の確保、さらに増加につながるかどうか、OCを実施する上での最大の関心事となる。OC参加者や新生を対象としたアンケート結果からは、志望度の変動等を主な指標として、次のようなOCの効果が示されている。三好ほか（2019）に

よると、OCは志望度を高めるが、その効果の程度は参加者の学年などの属性によって異なることが示されている。OC参加の効果が高かったのは、元々志望度の高い高校生や高校3年生であった。同じく志望順位について調べた野口（2018）においては、OCに参加することで志望順位の変動が起こることが示された。その変動には、志望順位が上がるだけでなく、下がることも含まれている。また、コロナ禍の影響で広がったWeb利用したOCの開催効果についても、対面型のOCと同等の効果が得られたり（田崎ほか, 2023）、対面型には及ばないものの、不参加の受験生よりは出願に関して肯定的な影響が見られたり（竹内, 2024）等の効果が示されている。ただし、OCへ参加するという時点で、すでにその大学への志望を決めていたり、興味を持っていたりするとも考えられる。そのため、OCの参加が志望校を決めるということはあまり期待できない（吉村, 2013）という指摘や、OCとは自大学が参加者に見極められることで、より志望度の高い参加者が残るシステムである（野口, 2018）といった指摘もある。これらの結果や指摘を総合すると、OCは、大学においては志願者の増加を期待しているが、実際は生徒にとっては志望する大学を見極め、決定するための場となっている。結果として、すでに志望しつつある生徒を志願者として確保する役割をOCが担っていると推察される。

志願者が実際に確保できたのかをさらに検証するためには、OCの志願者が実際に出願したのかを検証する方法が考えられる。森川ほか（2017）は、OC参加者の入試動向を分析し、OC参加者の翌年度入試の志望率と受験率はともに20%台後半であること、合格者に対するOC参加者の割合は実施時期の早い入試方法で参加率が高いことを示している。

## 1.2 本研究の目的

本研究ではOCと志願行動との関連性を以下の複数の側面から検証した。志願行動とは、ここでは入試に関わる様々な行動とし、具体的には①OC参加者の出願率 ②出願者のOC参加率だけでなく、その他の分析として③キャンセル者の出願率、参加回数と参加パターン別の比較、OC参加者と不参加者（キャンセル者を含む）の出願率、出願回数、入試欠席率、合格率、辞退率の比較も行った。出願率や参加率だけでなく、様々な側面を比較することで、OCの参加が志願者の確保につながる可能性を示せるようにした。

## 2 方法

### 2.1 調査対象

本調査は、琉球大学で開催された令和3年度、令和4年度、令和5年度の過去3年間のOC参加者と令和6年度入試（令和5年度実施）の出願者を対象とした。

OCの申込者数（実人数）と概要は以下の通りである。令和3年度OC（以下、R3OCとする）の申込者数は1,066名で、コロナ禍の影響でWebでの開催とした。開催日は2023年7月10日（月）であった。令和4年度OC（以下、R4OCとする）の申込者数は3,428名で、このOC以降、従来通りの対面開催となった。開催日は令和4年7月17日（日）であった。令和5年度OC（以下、R5OCとする）の申込者数は3,835名で、開催日は令和5年7月16日（日）であった。また、どの年度のOCにおいても、沖縄県外からの参加者はR3OCで15.4%、R4OCで7.0%、R5OCで10.7%と、沖縄県内からの参加者と比較して少なかった。これら3年間のOCの参加はすべて予約制としており、運営にはOCANsという予約管理システムを活用した。このシステムを用いて必要な情報を収集した。

次に、令和6年度入試（以下、R6入試とする）の出願者は延べ人数で5,372名であった。いずれの対象者に対しても、個人情報取得にあたっては研究目的で利用する可能性があること、その際は個人が特定できない形に加工することを予め断っていた。

## 2.2 手続き

### 2.2.1 リスト作成とデータの照合

OCの参加者について、年度ごとに氏名、学年、高等学校等コード、参加状況（参加・キャンセル）、高校所在地の5項目を抽出しリストを作成した。R3OCの申込者リストをR3OCリスト、R4OCの申込者リストをR4OCリスト、R5OCの申込者リストをR5OC

リストとする。OCリストの作成では、高校1年生から3年生、既卒生のいずれにも該当しない参加者はリストから除いた。除外された参加者は保護者、教員、専門学校生等であった。

出願者リストは、氏名、卒業状況（現役・浪人）、高等学校等コード、受験状況（出席・欠席）、合否（合格・不合格）、入学状況（入学・辞退）および高校所在地の7項目を抽出して作成した。

両リストに含まれる高校所在地は高等学校等コードを利用して、沖縄県の高校を県内、それ以外であれば県外として振り分けた。なお外国の学校等や高等学校卒業程度認定試験等は県外に分類した。

出願者リストにおける受験状況の「出席」と「欠席」は以下のように定義した。「出席」は一度でも受験した者とした。複数の段階の選抜がある選抜区分の一部でも受験した者は「出席」と分類されている。「欠席」は、一切受験しなかった者とした。なお、「欠席」には、後期日程に出願したものの、前期日程で他大学に合格したために後期日程を欠席した者や、失格と取り扱われた者も含まれる。

リストの作成に続いて、各年度のOCリストと出願者リストのデータ照合を行った。氏名の漢字表記と高等学校等コードが一致するデータを同一人物とみなした。一致のチェックはExcelの関数を用いて機械的に行った。そのため、別人を同一人物とみなすケースと、同一人物を検出できないケースが想定される。前者は同姓同名の生徒が同じ高校にいる場合に生じ、出願者数を過大にカウントすることにつながる。後者はOC申込や出願時に本人の記載ミス等によって起こると考えられ、出願者数を過小にカウントすることにつながる。このうち後者の、同一人物なのに一致しないケースの方が、前者の別人を同一人物と誤認するケースよりも発生する可能性が高いと推察される。そのため、本調査の結果は、過大に評価されたものではないと判断した。

### 2.2.2 OC参加者の出願率の算出

各年度のOCリストから参加者のみを抽出し、出願リストと照合して、各個人の出願の有無を調べて出願率を算出した。出願率は、OCに参加し、かつ出願した人数をOCに参加した人数で除して求めた。出願率の算出は年度ごとに行い、参加時の学年別に県内・県外にも分けて算出した。なお、R5OC時点での高校1年生と高校2年生、R4OC時点での高校1年生はR6入試の受験年度ではないため、対象としなかった。

表1 R6入試における各年度OC参加者の出願率

		R5OC	R4OC	R3OC
OC参加時の学年	既卒生	50% (40/80)	10% (2/20)	4% (1/24)
	県内	61% (34/56)	22% (2/9)	8% (1/13)
	県外	25% (6/24)	0% (0/11)	0% (0/11)
	高校3年生	68% (944/1,386)	8% (93/1,147)	2% (12/648)
	県内	69% (895/1,292)	9% (90/1,058)	2% (12/574)
	県外	52% (49/94)	3% (3/89)	0% (0/74)
	高校2年生		43% (327/763)	5% (8/146)
	県内		44% (314/704)	7% (8/108)
	県外		22% (13/59)	0% (0/38)
	高校1年生			49% (25/51)
	県内			54% (25/46)
	県外			0% (0/5)

注1) 表中網掛け箇所が、R6入試における現役生。網掛けのない部分は既卒生。

注2) 括弧内はOCに参加し、かつ出願した人数/OCに参加した人数。

### 2.2.3 出願者のOC参加率の算出

出願者のOCへの参加経験を示すOC参加率は、以下の手順で算出した。まず、上述したOCに参加し、かつ出願した人に対し、それぞれの出願回数に乗じて延べ人数とした。出願回数とは、各個人がR6入試に出願した回数を指し、学校推薦型選抜と前期日程、後期日程に出願した人は3回となる。このOC参加経験のある出願者数(延べ人数)を出願者数(延べ人数)で除してOC参加率を求めた。

### 2.2.4 その他の分析

OCの効果をより詳細に検証するため、以下の集計を行った。集計する対象は、令和6年度入試における現役生(R5OCの高校3年生、R4OCの高校2年生、R3OCの高校1年生)とした。

- ① キャンセル者(OCに申込んだが参加はしなかった者)の出願率。キャンセル者のうち出願した人数をキャンセル者で除して算出した。
- ② OC参加パターン別の出願率と平均出願回数、合格率。合格率は合格した人数を受験した人数で除して算出した。本研究では、OCの参加回数とその時期に基づき分類したものを参加パターンとした(表3)。例えば、同じ参加回数2回でも、R5OCとR4OCに参加したパターン、R5OCとR3OCに参加したパターン、R4OCとR3OCに参加したパターンの3通りが存在する。
- ③ 出願者リストから重複を取り除き、OC参加者と不参加者(キャンセル者を含む)の2群に分け、平均出願回数と欠席率(欠席した人数を出願した人数で除す)、合格率、辞退率(辞退

した人数を合格した人数で除す)を比較した。

## 3 結果と考察

OC参加者の出願率、出願者のOC参加率については、現浪別、沖縄県内・県外別でも集計し、必要に応じて比較を行った。

### 3.1 OC参加者の出願率とまとめ

R5OC参加者(現役生と既卒生の合計)の出願率は67%であった。表1は、R6入試における各年度OC参加者の出願率を現浪人別に示している。現役生については、出願率はR5OC参加者が最も高く(68%)、続いてR3OC参加者(49%)、R4OC参加者(43%)となった。このうちR5OCとR4OCの間には有意差が認められた( $\chi^2(1) = 129.87, p < .001$ , Holm補正,  $V = .25$ )<sup>1)</sup>。このことから、OCへの参加と出願が結びついていること、中でも直近のOC参加が出願と結びついている可能性が示唆された。

既卒生については、R5OC参加者の50%が出願していた。この結果も直近のOC参加が出願と結びついている可能性を示している。R4OCとR3OC参加者はすでに大半が入学済みであると考えられるが、それでも出願率がR4OCは10%、R3OCは4%であったことから、出願があることがわかった。

沖縄県内からのOC参加者と県外からのOC参加者を比較すると、すべての学年と開催年度において県内からの参加者の方が出願率が高いことがわかった。琉球大学は元々沖縄県内からの志願者数が県外からの志願者数と比較して多いことや、県外の参加者は志願の選択肢が多いことが理由として挙げられる。

表 2 R6 入試における出願者の OC 参加率

出願時の学年等	R5OC			R4OC		R3OC		出願者数
	既卒生	2 % (61)	6 % (145)	1 % (33)	2,446			
高校 3 年生	県内	8 % (53)	21 % (141)	5 % (33)	669			
	県外	0 % (8)	0 % (4)	0 % (0)	1,777			
	合計	40 % (1,624)	13 % (550)	1 % (43)	4,097			
	県内	57 % (1546)	19 % (529)	2 % (43)	2,720			
	県外	6 % (78)	2 % (21)	0 % (0)	1,377			

注) 括弧内は OC 参加経験のある出願者数。

### 3.2 出願者の OC 参加率とまとめ

R6 入試出願者の R5OC 参加率 (現役生と既卒生の合計) は 25% であった。R3 から R5OC すべての参加率 (現役生と既卒生の合計) とすると、38% となった。

表 2 は R6 入試における出願者の各年度 OC 参加率を現浪別に示している。まず、現役生については、出願者数 4,097 件のうち 40% にあたる 1,642 件が R5OC 参加者であった。R4OC 参加者は 13%、R3OC 参加者は 1% であった。これらの結果からも、出願率と同様、OC への参加と出願が結びついていること、直近の OC 参加が出願に結びついていることが示唆される。

既卒生については、R5OC より R4OC の参加率の方が高かった。この結果については、R6 入試における既卒生は R4OC 参加時には高校 3 年生であったことや、既卒生の方が高校 3 年生よりも参加者数が少ないためであると考えられる。つまり、高校 3 年生の時の参加と出願が結びついている可能性が示唆された。

県内・県外で比較すると、沖縄県内からの志願者の方が OC 参加率が高く、特に現役生の R5OC 参加率は県内 57%、県外 6% と大きな差があった。沖縄県内からの出願者の半数以上が OC に参加した上で出願しているのに対し、県外からの出願者のほとんどは OC に参加せずに出願していたと言える。

### 3.3 その他の分析の結果とまとめ

先述したように、その他の分析では主に現役生のみを分析対象とし、必要に応じて既卒生の分析も行った。

#### 3.3.1 OC キャンセル者の出願率

OC に申込んだものの、事前にキャンセルして当日参加しなかったり、当日欠席したキャンセル者は 325 名、そのうち R6 入試に出願したのは 149 名で、出願率は 46% であった。OC 参加者の出願率 (68%) と比較すると低かった ( $\chi^2 (1) = 56.56, p < .001, V = .18$ ) が、約半数は出願していることがわかった。

県内・県外を比較すると、出願率は県内 49%、県外 22% であり、OC 参加者と同様に、県内の方が高い傾向にあった ( $\chi^2 (1) = 10.79, p = .001, V = .18$ )。

#### 3.3.2 OC 参加回数別の比較

OC 参加回数と参加パターン別の集計結果を表 3 に示した。人数としては、高校 3 年生の 1 回のみ参加した者が最も多く、1,148 名で、全体の 59% を占めていた。2 回参加した者は 243 名、3 回参加した者も 2 名いた。参加回数の出願率を比較すると、2 回参加した者の方が 1 回参加した者よりも出願率が高かった ( $\chi^2 (1) = 81.59, p < .001, V = .21$ )。

参加した際の学年について分析を行ったところ、高

表 3 R6 入試における現役生の OC 参加パターン別の出願率

参加回数	OC 参加パターン			出願率	平均出願回数	合格率
	R5OC	R4OC	R3OC			
1	○	×	×	66 % (760/1,148)	1.7	58 % (417/722)
	×	○	×	29 % (152/530)	1.6	55 % (78/141)
	×	×	○	25 % (6/24)	1.3	100 % (5/5)
	小計			54 % (918/1,702)	1.7	58 % (500/868)
2	○	○	×	76 % (167/219)	1.7	64 % (101/159)
	○	×	○	94 % (16/17)	1.9	60 % (9/15)
	×	○	○	14 % (1/7)	1.0	- (0/0)
	小計			76 % (184/243)	1.7	63 % (110/174)
3	○	○	○	50 % (1/2)	2.0	100 % (1/1)
	計			57 % (1,103/1,947)	1.7	59 % (611/1,043)

注) ○が参加, ×が不参加

校3年生の時に参加した者とそうでない者の出願率は、前者は68%、後者が28%で、前者の方が高かった ( $\chi^2(1) = 257.18, p < .001, V = .36$ )。平均出願回数と合格率については、参加回数や参加した学年による差は認められなかった。

### 3.3.3 参加者と不参加者の平均出願回数と合格率、入試欠席率、入学辞退率

R6入試の重複を除いた出願者（現役生のみ）は2,879名であった。そのうち、R3からR5のOCに一度でも参加した者は1,079名（37%）、一度も参加しなかった者は1,800名（63%）であった。参加者の平均出願回数は1.7回で、合格率は58%であった。一方、不参加者の平均出願回数は1.3回で、合格率は54%であった。

それぞれを比較すると、平均出願回数は参加者の方が参加しなかった者より多かった ( $\chi^2(3) = 354.24, p < .001, V = .35$ )。合格率に差はなかった。

入試欠席率については参加者が5%、不参加者が23%、入学辞退率は参加者が4%、不参加者が14%でどちらも参加者の方が低いことがわかった。

## 4 考察

本研究は、OCの参加と志願行動の関係を、出願率、参加率、出願回数、欠席率、合格率、辞退率等の複数の側面から検証した。その結果、OC参加者の出願率は高く、特に高校3年生時のOC参加者の出願率が高かった。さらに参加回数が多いほど出願率が高い傾向がみられた。加えて、OC参加者は出願回数が多く、欠席率・辞退率は低いことも明らかとなり、志願行動との一定の関係が示唆された。

### 4.1 OC参加と志願意欲の関連

OC参加が志願行動と結びついていた背景には、進路選択を目前に控えた高校生が、OCを通して大学生活をより具体的にイメージできた可能性がある。自己決定理論 (Deci and Ryan, 1985) の観点からすれば、OCは高校生の内発的動機づけを促し、「自分の意思で進学先を選ぶ」という感覚を支える役割を果たした可能性がある。加えて、2回以上参加した生徒の方が1回参加の生徒より出願率が高いという結果は、OCが態度変容や進学意欲の強化、つまり生徒自身の選択に確信を持たせる役割を担っている可能性を示している。

OCの参加が志願行動に結びついていた一方で、OC不参加者は参加者と比べて出願回数が少なく、入試欠席率と入学辞退率が高かった。つまり、不参加者

の方が「入学に繋がる行動」をとっていないと言える。大塚 (2025) は、第一志望者と第一志望以外の者を比較すると、第一志望者以外の者のOC参加率が低いことを示している。このことから、OC不参加者は琉球大学が第一志望でなかった可能性が示唆されるが、本研究ではこの点について明らかにすることはできず、今後の課題となるであろう。

ただし、先行研究が指摘するように、すでに志願する意欲が高い者がOCに参加した可能性が排除できないため、OCの効果は「志望者を増やすもの」というより、「すでに関心のある層に対して確信を与える機能」として捉えるのがやはり妥当であろう。OCは、入試広報の一環としてではなく、自大学の教育理念や特色に共感する受験生を惹きつける「接点の場」として再設計するとよいであろう。

### 4.2 高校3年生時の参加と出願の関連

出願率については、高校3年生の時に参加した者の出願者が多かった。このことは、進路決定に直結する時期のOCが、志望校の絞り込みに寄与している可能性を示している。やはり、3年生にとってのOCは、「見極めの場」としての意味合いが強く、実際の大学で得た雰囲気や教育内容、研究を自分事として捉えることに繋がりがやすいのではと考えられる。なお、既卒生の出願率はR4OCが高かった。多くの既卒生にとって、R4OCは高校3年生に当たる。そのため、3年生で志望校を絞り込み、卒業後の時間は志望校のために勉強する時間に充てていることが推察できる。

一方、高校1年生や2年生の時点は大学についての情報を集めたり、それを基に選択肢を広げたりすることがOCの主な目的になっていると考えられる。この段階でのOC参加は志願行動には直結しづらいが、複数回参加した生徒の出願率が高かったことから、早期からの大学と高校生との関わりが志望校選択において一定の役割を担っているという可能性も示唆される。今後は、1,2年生向けには興味を喚起するようなプログラム、3年生向けには見極めに資するようなプログラムを設計する等目的を明確にしつつ、OCのプログラムを設計するとよいだろう。このような工夫を行うことで、より有意義なOCが開催できるであろう。

### 4.3 沖縄県内・県外の違い

県内と県外の参加者を比較した結果、すべての学年・年度において県内からの参加者の方が出願率が高かった。これは、県内生の方がアクセスしやすく、また進学先として琉球大学がより現実的な選択肢として捉え

られていることが理由として挙げられる。一方、県外からのOC参加率は低く、出願率にも反映されていない。地理的な制約や情報格差の存在が推察されるとともに、実際、県外生の中にはOCに参加せずに出願した層が多く含まれていた。このことは、県外出願者の中に大学の実態を十分に理解しないまま受験する層がかなりの人数いる可能性を示しており、ミスマッチのリスクも内包している。今後はWEB型の説明会や県外での説明会等多様な手段による情報提供と相互理解の機会を拡充することで、入学後の納得感や継続率の向上にもつながる施策が期待される。

#### 4.4 今後の課題と高大接続への展望

本研究から、OCは出願行動と一定の関連をもち、特に高校3年生時の参加や複数回参加が志望確定に寄与している可能性が示された。今後の課題としては、こうした関連性の因果的メカニズムの解明に加え、学年や地域によって異なるOCの意義を踏まえたプログラム設計が挙げられる。

なお、本研究においては、OCの参加と志願行動の関係を検証する際に学部や選抜区分を区別せず、一括で分析を行っているが、これらにおいて受験者の志望度や行動傾向には差異がある可能性は高い。実際に森川ほか(2017)はこの可能性を示している。この一括で分析を行っている点は、本研究の限界の一つであり、今後の課題として選抜区分別、学部別の分析を行うことで、より精緻な検討を進めていく必要があると考えられる。

最後に、OCが出願の選別ではなく、入学後の納得感や定着支援につながる「高大接続の場」として機能するためには、単なる説明会にとどまらない教育的意図をもった構成が必要である。特に県外生など事前接点の少ない層に対しては、WEBや出張型の取り組みを通じた接続支援が今後の展開として期待される。OCは「志願動向を読む」場から、「高大間の相互理解を促進する」場へと進化すべき局面を迎えていると言えるだろう。

#### 注

1)  $V$ はCramerの $V$ 係数で、 $\chi^2$ 乗分析において最も一般的に使用される効果量の尺度である。0は関連性がないことを、1は完全な関連性を示す。

#### 参考文献

Deci, E. L., and Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior*, Plenum.

小島理絵 (2010年5月26日).「オープンキャンパス考—上—『大学の何を伝えるか オープンキャンパスの成り立ち』」『教育学術オンライン』第2402号.

[https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2402/3\\_3.html](https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2402/3_3.html)

三好登・望月聡・福井寿雄・西郡大・吉村宰・當山明華・藤井良宣 (2019).「進学希望の変化に与えるオープンキャンパスの効果研究—九州地区国立4大学によるベンチマーキングを通して—」『大学入試研究ジャーナル』29, 124-131.

文部科学省 (2024).「高等教育機関への入学状況(過年度高卒者等を含む)の推移」令和6年度学校基本調査. [https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=dataset&toukei=00400001&tstat=000001011528&stat\\_infid=000031852309](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=dataset&toukei=00400001&tstat=000001011528&stat_infid=000031852309)

森川修・山田貴光・古塚秀夫 (2017).「オープンキャンパス参加者の入試動向—鳥取大学の事例—」『大学入試研究ジャーナル』27, 149-154.

日本私立学校振興・共催事業団 (2024).『令和6(2024)年度 私立大学・短期大学等 入学志願動向』日本私立学校振興・共済事業団 私学経営情報センター 私学情報室.

<https://www.shigaku.go.jp/files/shigandoukouR6.pdf>

野口将輝 (2018).「オープンキャンパスで変わる参加者の志望順位—オープンキャンパスの広報効果の測定方法の提起—」『大学入試研究ジャーナル』28, 209-214.

大塚智子 (2025).「志願者アンケートより第一志望ではない志願者における志望大学選択に関する特徴と探る」『令和7年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(第20回)発表予稿集(オープンセッション用)』, 141-145.

竹内正興 (2024).「WEB型オープンキャンパスの開催効果—K大学入学者の情報参考度・出願校決定時期・第1志望率に着目して—」『大学入試研究ジャーナル』34, 147-154.

田崎優里・山田恭子・浦崎直光 (2023).「WEB型オープンキャンパスの特徴と効果—来場型オープンキャンパスとの差異に着目して—」『大学入試研究ジャーナル』33, 1-6.

吉村宰 (2013).「新入生の受験校決定理由の特徴と入学時点での「気持ち」および学業成績との関連」『大学入試研究ジャーナル』23, 63-70.